

男の育児

～ 新生児にすべてを費やした 2006 年夏～

岩田 将英

近年、「男の育児」という言葉の響きにそれほどインパクトはなく、かえって差別的ですからある。しかし、社会的性差に配慮した言葉の使用へのデリケートさとは裏腹に、実際の男女共同参画はそれほど進んでいない。

2006年6月に国立社会保障・人口問題研究所より発表された「第3回全国家庭動向調査」(03年7月実施)の結果を見ると、フルタイムで働く妻の夫のうち約2割は家事を全くせず、1歳未満の子どもがいる夫婦の約1割の夫は全く育児をしない、というデータがある。しかも、夫が参加する育児の内容は「遊び相手をする」「風呂に入れる」といった軽微な領域で約8割の参加をみるのに対し、「食事をさせる」「おむつを替える」といった項目では約半数。全体の傾向として手のかかる育児項目では「ほとんどやらない」が過半数を占める。さらに親と同居している夫婦の夫は別居の夫婦より家事、育児とも参加が少ない。

筆者は2ヶ月の夏休みがあるという奇跡的な状況があったので、妻は実家に戻らず夫婦2人で出産を迎えることにした。さりとてそれまで家事は全くといっていいほどやっておらず、妊娠中は夕食後の食器洗い程度しかしていなかった。

授乳以外の育児を折半し、家事のほとんどをやってみて一番大変に感じたのは精神的な健康を維持することである。職場から大学院へ派遣されていて、一般的なだんな様より時間的にも余裕がある筈なのだが、結構きつかった。

というのも、女性は出産後ホルモンのバランスが崩れ、精神的に不安定になる「産後うつ」という症状がある。我が妻はそれほどではなかったが、テレビの泣かせ番組にウルウルしている「奇妙な」光景を何度も目にした。それからなんといっても夜泣きによる寝不足の影響である。新生児は2時間おきくらいに授乳を要求するので、その都度起きなければならない。寝不足になると人間は感情のコントロールが効かなくなってくる。些細なことで喧嘩になった。

しかも夫婦2人だけで育てていると、わからないことが多い。右目に目やにが出ている事態にどう対処すればよいのかとか、おしりが赤いけれどもこれはおむつかぶれか否かとかである。幸いに出産した病院が大変親切で、24時間態勢で電話相談をしてくれる。社会的サポートの重要性を強く感じた。

1ヶ月健診を迎える今、妊娠から出産、1ヶ月を総括すると次のようなものになる。

まず、出産も大変だが、何よりもその後がもっと大変で、母親だけでは育てられないこ

とを痛感した。絶対に周りのサポートが必要である。しかし、夫の協力云々だけで解決する問題ではないと感じる。筆者のように学生時代に児童相談所でベビーシッターをした経験があり、現在も子ども関係の仕事についており、大学院生で2ヶ月も丸々夏休みがある、という条件であっても育児は容易ではない。

ましてフルタイムで働いている旦那様が育児に協力するというのは、結構大変である。おそらく何をどうしたらいいのかわからない上に、肉体的にも精神的にも疲弊した妻が攻撃性を向けてくる事態に遭遇することだろう。「俺だって仕事で疲れているんだ！」ということになるだろう。

私たち夫婦が大喧嘩をしながら見つけた答えは、無理をせずお互いの分担を明確にすること。できないことは話し合って妥協する。それから暗黙の了解ではあるが、相手に感謝と思いやりを示すことであった。

しかし夫婦の努力だけでは限界がある。先程挙げたようなアフターケアの充実した産婦人科の病院のような社会的サポートは欠かせない。出張先という慣れない環境で出産・育児を迎えた私たちには神様みたいな存在に見えた。

今日、産婦人科の病院が減少し、無医村もあると聞く。社会体制の維持・発展にはなんといってもまず人を育てることである。育てる前に生まなければならない。政治や経済もまずこの社会を支える人を増やしていく政策を第一に進めていくべきではないかと、子どもの寝顔を見ながら感じたのであった。



生まれたばかりのわが子（撮影：筆者）